

## 仏教における心の諸相〈講演〉

京都光華女子大学・図書館長 可藤豊文

昨年(平成13年)の4月、本学の図書館長に就任し、ほどなく課長さんから今年は大谷大学さんと共催で佛教図書館協会の研修会を開催しなければならないと聞かされました。その時、過去6回の研修会の内容を見せていただきましたが、果たして、本学がそれに値するだけのものを提供できるかどうかとても不安でした。そこで、一つは大蔵経(巴蔵漢)の基礎知識と扱いについて渡邊先生にご講義をお願いするとして、もう一つをどうするかという問題が残りました。しかし、佛教図書館協会の加盟校を見ていると、当然のことながら、これら各大学の教育の背景に仏教があり、それをもう少し具体的に言いますと、それぞれ各宗各派の祖師方がおられることに気付きます。例えば、本学は浄土真宗の開祖親鸞聖人(以後、祖師方の敬称は略させていただきます)の教えを教育の基本に据えているように、宗祖の教義(教え)がそれぞれの大学設立の背景にあるということが分かります。

僕自身がこの大学に拾われ、もう20年以上も学生対象に仏教の入門のような講義をしているのですけれども、親鸞の生涯と思想をお話することはもちろんですが、実は皆様方の大学設立の背景にあります祖師方からも多くのことを学ばせて頂いています。そこで今日は、彼らに対する畏敬と感謝の気持ちを込めて、僕が理解している仏教についてお話して

みたいと思った訳です。1時間という限られた時間でもあり、また全ての祖師方に言及することはできませんが、おおよそ僕自身が仏教をどのように考えているかをお話できればと思っています。前置きはこれぐらいにいたしまして、講題は「仏教における心の諸相」とさせていただきますが、用意いたしました資料に即してお話を進めさせていただきます。

### §1 仏教の二つの意味

#### §2 仏と衆生

衆生は悟らずして長夜に苦を受け、諸仏はよく覺つて常恒に安樂なり。

空海『平城天皇勸頂文』  
まさに知るべし、生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす。

法然『選択本願念仏集』  
広劫多生のあいだ、いくたびか徒に生じ、徒に死せしに、まれに人身を受けて、たまたま仏法にあえるとき、この身を度せずんば、何れの生にか、この身を度せん。

懷奘編『正法眼蔵隨聞記』  
悲しみても悲しむべきは、流転永劫の罪累、恐れても恐るべきは生死長夜の苦果。

白隠『遠羅天釜』

§3 生死を超える(生死出離)

比丘たちよ、私はまだ正覚を成じなかつた時、かように考えた……まことに、この世は苦の中にある。生まれ、老い、衰え、死し、また生まれ、しかも、この苦を出離することを知らず、この老死を出離することを知らない。まことに、いずれの時に、これらの出離を知ることができようか。

『雑阿含経』

衆生は生死の苦海を出離せんことを求めず。

慧能『六祖壇経』

ただ後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちおぼ、ただ一筋に仰せられそうらいしをうけたまわりさだめてそうらいしかば……。

親鸞『恵信尼書簡』

§4 心の諸相

生死はただ心より起る。  
心もし滅することを得ば、  
生死も則ちまた尽きん。

『華嚴経』

① 妄心と真心(『大乘起信論』) ② 散心と本心(『親鸞聖人五ヶ条要文』)

③ 妄念と本心(空海)  
一切の妄念はみな本心より生ず。本心は主、妄念は客なり。本心を菩提と名づけ、また仏心と名づく。

空海『一切経開題』

④ 妄心と本心  
人の心は愚かなるものにして、みだりに物に移り、物に恐れ、物に誑かざることを。かくの如くの妄心を楽しみて、本来の本心を失うこと、大いなる錯りなり。

正三『反古集』

⑤ 心(妄想)と心性(親鸞、ロンチェンパ)

罪業もとよりかたちなし 妄想転倒のなせるなり

心性もとよりきよけれど この世はまことのひとぞなき

親鸞『愚禿悲嘆述懐』

(A) 心=妄心=散心=妄念=妄想転倒の心……心理学が扱っている心。

(B) 心性=真心=本心=一心=信心=仏心……仏教が説こうとしている心。

§5 悟りと解脱

迷は即ち自家の本心に迷い、悟は即ち自家の本性を悟る。一たび悟らば永えに悟り、また更に迷わず。

『馬祖の語録』

本心を識らずんば、法を学ぶも益なし。もし言下に自らの本心を識り、自らの本性を見れば、即ち仏と名づく。

慧能『六祖壇経』

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/9248/>

まず §1 「仏教の二つの意味」ということについてお話し致します。言うまでもなく、仏教とは仏陀(悟りを開いた覚者=釈尊)が説かれた教えということで仏教という訳ですが、その釈尊ご自身は29歳で出家し、修行僧となるのですが、その彼もまた一人の人間でした。その彼が6年の修行の末に悟りを開いて仏陀(覚者)となられたということです。そうしますと、仏教は具体的には何を説いているかということ、私たち人間がいかにして仏、すなわち真理に目覚めた覚者になり得るかということが仏教という言葉に含まれているはずで、従って、仏教には、仏陀の教えということとはもとより、私たち人間が仏と成るための教えという二つの意味があると思います。

次に §2 「仏と衆生」と書かせていただき

ました。すでに仏典に馴染んでおられます皆さんはご存知かと思いますが、衆生という言葉は私たち人間を指しています。そして、この衆生である私たち人間が仏と成っていく、その道筋・方法を説いているのが仏教ということです。そうしますと、私たち人間を、厳密には二種類に分けることができます。一つは、いわゆる衆生と言われる人間、もう一つは真理に目覚めた仏(覚者)ということです。このように、人間は「仏と衆生」という二つのカテゴリーに分けられると思います。

では、祖師方はどのように私たち人間(衆生)と仏(覚者)を捉えておられるかということ、いくつか紹介しながらお話を進めていきたいと思えます。まずは、真言密教の空海から次の文章を挙げておきました。

衆生は悟らずして長夜に苦を受け、諸仏はよく覺つて常恒に安樂なり。

ここには仏(諸仏)と衆生の違いが明確に語られています。衆生、つまり私たち人間は悟ることができないで苦を受けているということです。何を悟るかにつきましては最後にお話しますが、ともかく私たちは今、悟ることができないで長夜に苦を受けている、と前半部で言っています。それに対して後半は、諸仏、すなわち真理に目覚めた仏陀(覚者)たちは常に安樂なりと言うのです。このように、空海も衆生と仏(諸仏)に分け、私たち人間は、現在悟ることができないで様々な苦悩を受けているという訳です。次に、法然の名著から引用しておきました。

まさに知るべし、生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす。

それでは、長夜に苦を受けている私たち衆生は今どこにいるのだろうかというと、法然は「生死の家」と言います。それでは、覚れる仏陀たち(諸仏)はどこにいるのかというと

「涅槃の城」なのです。ちょうど、私たちが衆生と仏の二つに分かれるように、そこに住まわしている世界もまた二つあるということです。つまり「生死の家」と「涅槃の城」という二つの世界があるのです。「生死の家」とは、いわゆる生死輪廻しているサンサーラの世界、そして「涅槃の城」とはニルヴァーナ(悟り)の世界ということです。このように、法然は世界を二つに分け、私たち衆生が今いるところは生々死々を繰り返している苦悩の世界であり、一方、仏たちは覺つて「常恒に安樂」である涅槃の世界にいるという訳です。では「生死の家」と言われているところが具体的にどういう世界なのかということですが、それについては道元から引用しておきました。少し読んでみましょう。

広劫多生のあいだ、いくたびか徒に生じ、徒に死せしに、まれに人身を受けて、たまたま仏法にあえるとき、この身を度せずんば、何れの生にか、この身を度せん。

まず、最初の言葉が非常に重要です。道元は「広劫多生」と言います。とりわけ「多生」というところが問題です。なぜなら、私たちは普通、人生は70年、80年で、一生と捉えていますけれども、明らかに道元はそうではなく、一度ならず生と死を繰り返しているということで「多生」となっています。しかも「広劫」ですから、遠い過去から今日に至るまで私たちは何度も生と死を繰り返してきたということで「広劫多生」なのです。すると、法然が「生死の家」と言ったことは、ただ生まれ、死して全ては終わりではなく、転々と生と死を繰り返している家(サンサーラの世界)ということであり、それが「広劫多生」という言葉の中に込められているのです。そして、この「広劫多生」という言葉は親鸞の中にも登場してきます(「広劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空いまさずば このたび空し

くすぎなまし』〔高僧和讃〕)。

続いて道元は「いくたびか」、何度もということですが、「徒に生じ、徒に死せしに」と言います。この「徒に」という言葉に私たちは注意する必要があります(親鸞的に言えば、上記の「空しく」となるでしょう)。というのも、私たちは遠い過去から、何度も徒に生まれ、徒に死んでいるという意味ですから、これはよく味わってみる必要があると思います。そして今、「まれに人身を受けて」、つまり幸いにも人間として生まれ、「たまたま仏法にあえるとき」ということですから、例えば、本学で言いますと、親鸞の思想を背景に設立された大学で、仏法ということが言われますけれども、なかなか本当にそれを自分の問題として受け止める人は本学にもどれほどおられるかと思えます。身近で仏教について語られているにもかかわらず、それに対して非常に抵抗のある人が少なくないと思います。それどころか、仏教精神などを標榜するから学生が集まらないのだというような、とんでもない意見まで耳にします。

仏教(広くは宗教)は人間の在り方そのものを問うているのですが、仏教を非難する多くの大人たちの宗教観は、本学に入学して来る18歳の学生とさして変わらないのではと僕は思っています。と言いますのは、ほとんどがメディアを通してインプットされている宗教観であり、それも例の教団などを引き合いに、おぞましく、いかがわしい危険思想の如く思われているのです。本当の意味の宗教、あるいは仏教の思想についてはほとんど耳に届くことはなく、社会をにぎわし、日常的にメディアを通して入ってくる情報に基づく宗教理解・仏教理解であろうと思います。

それはともかく、道元はさらに、「この身を度せずんば、何れの生にか、この身を度せん」と言います。「度す」という言葉が使われて

いますが、これは「渡す」という意味です。例えば、こちらの岸から向こうの岸に船で渡るという意味です。それでは、こちらの岸、此岸ですが、これは何かというと、生死輪廻するサンサーラの世界であり、渡るべきところは彼方の岸(彼岸)、すなわち涅槃の世界ということです。それが「度す」という言葉の意味なのです。そうしますと道元は、私たちは遠い過去から、徒に生と死とを繰り返してきたのですが、今、たまたま仏教(仏法)に出会っているのだから、この機会を捉えて此岸の世界から彼岸の世界へ、サンサーラの世界(生死の家)からニルヴァーナの世界(涅槃の城)へと渡って行きなさい。そうでなければ、次にそういうチャンスがいつ訪れるか誰も保証できません。そう道元は私たち衆生に呼びかけているのです。次は白隠です。

悲しみても悲しむべきは、流転永劫の罪累、恐れても恐るべきは生死長夜の苦果。一生の間に、私たちは時に悲しみに出会い、また悲惨な光景を目にすることもあるでしょう。しかし白隠は、それも確かに悲しいことに違いないが、本当に悲しむべきは何かというと、生死流転している、今のあり方そのものが最も悲しむべきことなのですよ、と言っているのです。そうして「恐れても恐るべきは」と彼は、私たちは日々の生活の中で、不安、恐怖、色んなことありますが、しかし本当に恐るべきことは徒に生まれ、徒に死を繰り返しているあなたの存在こそ最も恐れなければならないことである、と言うのです。

「仏と衆生」ということでお話しましたように、私たち人間は悟ることができないで空しく生々死々を繰り返している、それこそが問題なのです。釈尊は何を説かれたのかというと、私たち生死に迷う衆生(人間)に対して、此の世界から彼の世界へ、サンサーラの世界からニルヴァーナの世界へと、今こそ渡って

---

行きなさい。でなければ、人間として生まれ、再びそういう機会に恵まれることは、なかなか容易ではないということです。よくご存知の『三帰依文』が「人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん」で始まるのも、そのためです。

そうしますと、私たち人間に要請されているものは何か、あるいは人間は何処に向かうべきかが少し見えてきます。それが§3の「生死を超える」(生死出離)ということになろうかと思えます。そこで、まず釈尊自身が自らの修行時代を回顧された文章を読んでみましょう。

比丘たちよ、私はまだ正覚を成じなかった時、かように考えた……まことに、この世は苦の中にある。生まれ、老い、衰え、死し、また生まれ、しかも、この苦を出離することを知らず、この老死を出離することを知らない。まことに、いずれの時に、これらの出離を知ることができようか。

29歳で出家し、6年の修行の末に悟りを開いとされる釈尊が、その間、何を考えていたのかというと、生まれ、老い、死し、そしてまた生まれ、この老死からどうすれば離れられるであろうかというのが、彼の修行における最大のテーマであったことを自分の弟子たちに語って聞かせているのです。

続いて、慧能の『六祖壇経』です。これは今日もご出席いただいていますけれども、昨年の研修会で花園大学さんから『六祖壇経』の全コピーを頂きました。非常に貴重な資料であり、この場を借りてお礼を申し上げますが、その中に、次のような言葉があります。

衆生は生死の苦海を出離せんことを求めず。

慧能は私たち人間(衆生)を見そなはし、有史以来、人類は様々な問題を抱え、識者は色んなことを言うけれども、この生死を超える(生死出離)ということについて語る人はほとんどいない。だからと言うべきか、「生死の苦海」を出離しようとする人(衆生)はいません、と言うのです。「生死の苦海」とは先に法然が「生死の家」と呼んだものであり、現在私たちがいるところなのですが、この言葉は親鸞の中にもそのまま出てきます。私たちが求めるべきは、また辿るべきは生死の苦海をいかにして離れるかということに尽きるという意味なのですが、それを言う為に、ここでは『恵信尼書簡』を引用しておきました。恵信尼というのは親鸞の妻であり、この書簡は親鸞亡き後、恵信尼が自分たちの娘であります覚信尼に宛てたものです。

ただ後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちおぼ、ただ一筋に仰せられそうらいしをうけたまわりさだめてそうらいしかば……。

本学は女子大ですので、いずれは母となっていく学生たちに、僕は夫と妻の関係、あるいは母と子について話すことがあります。そのときはいつもこのお話をします。夫婦の間で、親子の間で一体何が語られるべきかが最も端的に表現されているからです。そして、その一つが今、問題にしています「生死を超える」、すなわち書簡にあります「生死出ずべきみち」なのです。

恵信尼曰く、あなたのお父さんは、29歳の時、比叡山から六角堂に百日参籠されました。そして95日目に、法然上人の下を訪ねられ、そのとき何を尋ねたかということ、「後世の事」であり、そして「生死出ずべきみち」をただ一筋に聞かれたのです。だから、あなたもそのことをよく考えてみなさいという内容の書簡です。

---



「後世の事」とは、人は死んだらどうなるのだろうかという漠然とした不安であり、親鸞もまたそのことを知りたかったのでしょうか。そして、彼が生涯を賭けて求めたものが、「後世」をも超える「生死出ずべきみち」、すなわち生死の迷いの世界(サンサーラ)から如何にして涅槃の悟りの世界(ニルヴァーナ)へと帰って行くかということであったのです。

これについて、学生のレポートのお話をしたいと思います。と言いますのは、僕が生と死について仏教学などの講義で話すものですから、やはり学生のレポートの中に死の問題について書いてくるケースがよくあります。その一人の例を挙げましょう。それは彼女が高校生の時でした。「お婆さんが亡くなり、通夜の日、物言わぬ、冷たくなったお婆さんの亡骸が仏壇の前に寝かされている。それを見た時、何とも言えない悲しみがこみ上げてきました。そして、翌日火葬に付され、1時間か2時間ほど待ち、出て来た、そのあまりの変わり様に言葉をなくすだけではなく、暑い夏の盛りでしたけれども、私の体が小刻みに震えていました。大人たちは、これは肋骨だとか、喉仏とか色んなこと言っていましたけれども、私はそんなことよりも、お婆さんはどうなってしまったのだろう、どこへ行ってしまったのだろうという想いが頭の中を駆け巡っていました」というような内容でした。おそらく、宗教というのは、こういうごく身近な経験の、その悲しい体験が核となっているのではないかと思います。

実は僕自身、大学の時に物理化学などをやっております、宗教の方向へ転向したのですが、いろいろ思い当たることもあり、学生のレポートを読んでいまして、こういう現実を突きつけられるという原体験と言いますか、そういうものがやはりあって、そして本学で仏教学の講義で生と死について聞くこ

とになり、それで当時のことを思い出し、レポートを纏めるということがよくあります。

もうひとつ逆のケースを挙げておきましょう。その彼女には妹さんが一人いて、家族四人でした。ある日、夕食のとき、お父さんが大学でどんなことを学んでいるのかと問われたそうです。そこで彼女は大学では仏教学という科目もあり、また死の問題などについて話を聞いていると言ったそうです。そうしますと、お父さんは「人間、死ぬときが来たら死ぬんだから、今よかったらいいじゃないか」と答えられたそうです。多くの大人たちは、言葉にこそ出して言いませんが、死の問題について(それはまた生の問題について)、このお父さんと同じように考えているのではないのでしょうか。僕は、釈尊出家の動機が生死(生・老・病・死)の問題であったように、そのように簡単に片付けてしまうのではなく、むしろ夏の暑い日に、小刻みに震えていたというあの学生の方を大事にしたいと思っています。

それでは、次の§4「心の諸相」に移らせていただきます。今日の講義になっています

「仏教における心の諸相」を僕がどう考えているかということをお話しましょう。そのために、まず『華嚴経』から引用させていただきました。読んでみますと、

生死はただ心より起る

心もし滅することを得ば、

生死も則ちまた尽きん。

この文章はとりわけ重要な意味を持っていると思います。なぜなら、初めに「生死はただ心より起る」とありますように、こんなことを言ったのは仏教以外ないのではと思います。僕はキリスト教神秘主義やスーフィズム(イスラーム神秘主義)などにも関心があり、そういう世界の宗教を比較研究しているのですが、心が私たちの生存(生と死)と結び付けて考えられている例はおそらく仏教しかない

---

のでは思います。

普通、心と言いますと、私たちは悲しいこと嬉しいこと、またあの人が好きだとか、嫌いだとか、良いとか悪いとか、そういう風に心は判断しますけれども、心というものが私たちの生まれること、そして死ぬことと深く関係しているというこの文章はとても重要な意味を含んでいると思います。そして「心もし滅することを得ば、生死も則ちまた尽きん」ですから、その心が消え去るならば、生死に迷っている衆生というあり方も終わるでしょう。つまり、心ゆえに生死輪廻する世界で様々な苦を受け、その心を除くことができたら私たちは生死を超えた涅槃の世界に行き着くでしょう、ということなのです。このように、心というものが一般の理解を超えて、私たちの存在そのものと深く関係していることをこの経典は見事に表現しています。

それでは「心の諸相」ということについて、もう少し具体的に見ていきましょう。初めに『大乘起信論』を挙げておきました。そこでは、心を①妄心と真心の二相に分けています。妄心と言いますのは、文字通り、妄りに起こる心という意味なのですが、他でもありません、私たちが普通に心と呼んでいるものであり、心理学が扱っているのもこの心なのです。それは決して特別なものではなく、先に『華嚴経』が「生死はただ心より起る」と言った、その心を指しています。そして、この妄りに起こる心の内側に真心があると『大乘起信論』は言うのです。この真心という言葉は、本学が教育の基本に据え、また校訓にしています<真実心>に当たるものです。このように『大乘起信論』は心を妄心と真心の二相に分けているのです。

次に『親鸞聖人五ヶ条要文』を挙げておきました。ここでは②散心と本心という言い方をしています。散心とは、文字通り、散乱の

心という意味で、先の妄心と意味は同じです。その散心に対して、本心があるということです。そして、空海もまた心を二相に分け、③妄念と本心と言います。少し読んでみます。

一切の妄念はみな本心より生ず。本心は主、妄念は客なり。本心を菩提と名づけ、また仏心と名づく。

ここで空海は心というものを妄念と本心に分け、妄念とは妄りに起こる想念(心)ということで、その一方に本心があると言うのです。そして、「本心は主、妄念は客」であるにもかかわらず、私たちは本末転倒して、あるいは主客転倒して、妄念に過ぎない心を自分の心だと思っていますが、本心こそ私たちの本当の心なのですよ、という訳です。さらに、「本心を菩提と名づけ、また仏心と名づく」ですから、菩提とは悟りのことですから、その心(本心)を知れば悟りともなり、また仏とも成るがゆえに、本心は仏の心(仏心)ということになるでしょう。このように空海は、心を妄念と本心の二相に分け、私たちは今、本心を知らないで、妄りに起こる心(妄心=妄念)に惑って生々死々を繰り返す衆生に甘んじていると言うのです。

次に挙げましたのは禅の思想家鈴木正三です。これが一番解り良いかと思いますが、『復古集』の中に見える言葉で、彼は心を④妄心と本心の二相に分けています。

人の心は愚かなるものにして、みだりに物に移り、物に恐れ、物に誑かざることを。かくの如くの妄心を楽しみて、本来の本心を失うこと、大いなる錯りなり。

いつの時代も大人から子供に至るまで物(金銭)に囚われ、物に狂い、心の教育を声高に叫ぶ識者も心(妄心)に楽しみ多きことのみを求め、本心があることをすっかり忘れていて。これこそ私たち衆生の最たる過ちなのだと彼は言うのです。言い換えれば、妄心にす

---

ぎない心に惑い、本心を知らないからこそ生死は絶えて終わることがなく、私たちはいつまでも生死に淪む衆生であり続けるということです。

最後に⑤は心と心性という分け方をいたします。心というのは、私たちが日常的に心と呼んでいるものです。そして心性とは心の本性という意味であり、心性とは何かというと先程の本心、あるいは真心のことです。この言葉は親鸞の中にも出てきますし、またチベット密教・ニンマ派の思想家でありますロンチェンパの中にも心と心性の違いが言われています。いずれも、心に惑い、生々死々を繰り返しているのが現在の私たち衆生であり、一方、心性を知ることが悟りであり、また生死を超えること(生死出離)にもなると説いているのです。ここでは親鸞の『愚禿悲嘆述懐』から引用しておきました。

罪業もとよりかたちなし

妄想転倒のなせるなり

心性もとよりきよけれど

この世はまことのひとぞなき

罪業、つまり私たちが生死輪廻する、そのカルマ(業)というものがどこから起こるのかと言いますと、これは妄想転倒の心、つまり私たちが心と呼んでいるものから生じて来るということです。『華嚴経』の初めに「生死はただ心より起る」とあった通りです。そして「心性もとよりきよけれど」とは、心の本性(心性)は誰もが本より具えている本有の心(本心)であり、その心は一切の汚れに染まないということで「心性もとよりきよけれど」と言います。ところが、今私たちはその心を知らないがために、親鸞は「この世はまことのひとぞなき」と結んでいるのです。要約すると、私たちは現在、心というものに欺かれ、生死輪廻を繰り返す迷道の衆生に過ぎません。しかし、心の本性(心性)は汚れなき心と

して誰もがすでに具えているものであり、それを知りさえすれば、「まことのひと=真人」となって、もはや再び生々死々を繰り返すことはないでしょう、となります。

このように見てきたところで、少し纏めてみますと、(A)はいわゆる心、それには妄心、散心、妄念、妄想転倒の心などがあり、私たちが日常的に心と呼んでいるもので、心理学が扱っている心です。一方、仏教はどういう心を私たちに説こうとしているのかというと、それが(B)の真心、本心、仏心、心性・・・などであり、ここに心理学と仏教が扱う心の違いがあるのです。

そして、この(A)と(B)の違いこそ私たちが生死輪廻の絆に繋ぎ止める心であるか、生死を超えて、彼岸の世界に到達する心かの違いになっているのです。(A)は現在私たち衆生がサンサーラの世界に逼迫している根源にある心であるのに対して、その心の内側には(B)の本心、真心、あるいは心性という名で呼ばれる心があり、その心を知って私たちは生死を超えたニルヴァーナの世界に到達するという訳です。

最後に§5「悟りと解脱」ですが、§2で「衆生は悟らずして」、「諸仏はよく覺つて」とありましたが、一体何を悟る(覚る)のかという問いが残っていました。もうお分かりかと思いますが、それを言うために、禅の思想家馬祖の言葉を挙げておきました。

迷は即ち自家の本心に迷い、悟は即ち自家の本性を悟る。一たび悟らば永えに悟り、また更に迷わず。

生死に迷うことになるのは、「自家の本心」を知らないからだだと彼は言うのです。この「自家」という言葉が大切なのです。私たち自身の心の内側に本より具わる本有の心(本心)というものがある。それで自家と言ひ、自分自身の心の内側が問題なのです。しかし、それ



---

はいわゆる心ではなくて、本心であり、その心を知ることが悟りであると言うのです。続いて「悟は即ち自家の本性を悟る」とありますが、自家の本性(自性)を心の本性と理解してもいいですし、本心でも結構です。もしそれを知ることができたら、生と死の軛を離れ(解脱し)、仏と成って、再び生死輪廻の陥穽に嵌ることはないであろうから、「一たび悟れば永えに悟り、また更に迷わず」と言うのです。最後に、もう一度『六祖壇経』を挙げておきました。

本心を識らずんば、法を学ぶも益なし。  
もし言下に自らの本心を識り、自らの本性を見れば、即ち仏と名づく。

この文章にすべてが言い尽くされていると思います。本心を知らなければ、どれだけ仏教(法)を学んでも、いやもっと広く学問をどれだけ極めようとも、何の利益にもなりませんと極論していますが、決して極論ではありません。これが事実だと思います。本心を知らなければ、仏教をただ学んでいるだけでも意味がありません。だから慧能は「本心を識らずんば、法を学ぶも益なし」言うのです。しかし、もし今ここで本心を知り、自らの本性を知ることができたら、生死を離れ、仏とも成るでしょうということなのです。

釈尊が6年間の修行の末に悟ったのは何かというと、この本心(真心=心性)、あるいは本性(自性)であり、それを知って私たちは生死の世界(サンサーラの世界)から涅槃の世界(ニルヴァーナの世界)へと帰っていくのです。しかし、現在私たち衆生は心の本性、あるいは本心が仏であることを知らないで、いくたびか徒に生まれ、徒に死を繰り返す(道元)、長夜に苦を受けている(空海)ということです。

最後に僕のホームページですけれども、今日の資料についてもアップロードしておきま

した。その他いくつかのテーマについても掲載していますので、もしよろしければご覧いただけたらと思います。予定の時間も参りましたので、これで僕のお話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

#### 参考文献

- ①可藤豊文『瞑想の心理学—大乘起信論の理論と実践—』(法蔵館)
- ②可藤豊文『自己認識への道—禅とキリスト教—』(法蔵館)
- ③可藤豊文「仏教における心の理解と瞑想」(『真宗文化』第11号)